

オノマトペの保育教材化

—領域「言葉」と領域「表現」の統合を企図して—

佐藤 友哉

Onomatopoeia as a nursery care teaching material

—Intended to integrate area “language” and area “expressions”—

Yuya SATO

要旨

オノマトペの保育教材化を目指した授業実践を検証する。オノマトペの視覚化やオノマトペを用いたクイズは保育内容の領域「言葉」と領域「表現」が統合されたものであり、言葉に対する感覚や感性を刺激し、それを豊かにする。また、事前に1週間オノマトペを用いた日記を書くことは活動をより楽しいと感じさせること、クイズを活動として成立させようという意識を高めること、当該オノマトペのイメージを固定させることに影響する。

キーワード：オノマトペ、領域「言葉」、領域「表現」、言葉に対する感覚、オノマトペ日記

1. はじめに

保育あるいは子どもと、オノマトペ（擬音語・擬態語）との関係をテーマにした研究は様々なものがある。例えば、幼児の発話に見られるオノマトペに関するものとして福田（1999）があり、保育者が子どもに対して用いるオノマトペに関しては村瀬・寺山（2018）が、オノマトペの保育教材化に関するものとしては松崎（2020）、中村（2021）がある。本論では、オノマトペの保育教材化を目指した授業実践の検証を1つ目の論点とし（4節、5節）、また、学生がオノマトペを用いた日記を書くことがオノマトペを使用した活動にどう影響するのかについても2つ目の論点として取り上げることにする（6節）。

2. 問題のありか

平成29（2017）年に改訂・告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「言葉」の「ねらい」（3）には次の下線部が追加されている（代表して幼稚園教育要領（文部科学省2018）を引用する。以下、上記要領・指針を引用する場合も同様）。

（3） 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。（p.301、下線筆者）

これに伴い、領域「言葉」の「内容の取扱い」（4）が新設された。

（4） 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。（文部科学省2018、p.302）

上記2箇所では、子どもが言語感覚を豊かにすることの必要性とその実現に必要な方法が示されて

いる。そのため、保育者養成校では、言語やその感覚を豊かにする活動について実践的に学ぶ機会が求められる。

ところで、幼稚園教育要領「第2章 ねらい及び内容」に「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない」（文部科学省 2018、p. 296、下線筆者）とあるように、1つの領域（本論では「言葉」）に係る活動は、他の領域との関連を念頭に置きながら進めるのが望ましい。

本論では、領域「言葉」と特に関連が深い領域「表現」を取り上げる。というのは、言葉は表現した際に他者に伝わるものであるし、表現の1つに言葉によるものがあるからである。平成29（2017）年に改訂・告示された幼稚園教育要領領域「表現」の「内容の取扱い」（1）には次の下線部が追加されており、領域「言葉」との関連箇所として注目される。

- (1) 豊かな感性は、身近な環境と十分に関わる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。（文部科学省 2018、p. 302、下線筆者）

ここでは「豊かな感性」を養う方法の1つとして、「風の音や雨の音」といった「自然の中にある音」に子どもが「気付くようにすること」が挙げられている。音に気付くための方法には、音を音声言語化して表現することが考えられる。その際、風であれば「ヒュー」、雨であれば「ザーザー」のようなオノマトペを使用することになる。したがって、オノマトペは、豊かな感性を養う方法として期待できるといえる。

オノマトペの語彙的特徴は、先に引用した領域「言葉」に関する記述にも当てはまる。まず、「言葉の響きやリズム」（内容の取扱い(4)）に触れるという意味で、音や感覚を模した表現であるオノマトペはそれに適うものである。また、オノマトペの響きやリズムを楽しんだり、ある現象に合致するオノマトペを探したりすることで、言葉に対する楽しいか否か、適否などの「言葉に対する感覚」（ねらい(3)）を豊かにすることも期待できる。

以上より、オノマトペを、言語感覚を豊かにする保育教材と見なし、その活用方法について検討することには十分な価値があるといえる。

3. 従来の指摘

オノマトペの保育教材化に関し、従来どのようなことが指摘されているのか。本節では、これについて論じた松崎（2020）、中村（2021）を見る。

松崎（2020）では、学生が授業でオノマトペかるた（読み句は五七調の三句構成で句頭にオノマトペを配し、絵札はオノマトペの意味がよく表れるようにしたもの）を作成するという活動について論じている。松崎（同）によれば、「保育・教育の双方において、オノマトペは教材として有用性が認められ」（p. 34）、オノマトペかるたは「すべての幼児が無理なく遊べ、幼児の言語感覚を養い、生活表現を伸張させ、小学校での学習の素地となる語彙を拡充する」（同頁、下線筆者）ものである。

中村（2021）は、非認知能力を高めることをねらいとした総合的な表現遊びの1つとして、学生が大学周辺を散策し（10月）、聴こえた音を集めてメモし、聴こえた音からオノマトペを作るという活動について論じている。中村（同）は「枯れ葉が風に運ばれる音や、自分たちが枯れ葉を踏んだ時の

音、虫の声などから秋を感じる学生が多かった」(p. 49) こと及び「それらの音をオノマトペにする際に、友達との感じ方の違いや、思い込んでいた音と違ったことに対する驚きなどが(佐藤注、学生の感想に)記載されていた」(p. p. 49-50) ことから「(佐藤注、音を)オノマトペにする活動を行ったことで、学生たちの感性も高まったようである」(p. 50、下線筆者)と指摘している。

上記2文献からもオノマトペを用いた活動は、言語感覚を養い、感性も高めることがわかり、2節に引用した領域「言葉」と領域「表現」の内容に合致するといえる。本論では松崎(2020)、中村(2021)が行ったものとは異なる、オノマトペを用いた活動について論じたい。

4. 授業内容について

(1) 対象学生及び授業日

授業の対象学生は、S短期大学幼児教育科2年生40名(全員女子学生)である。以下の内容は2020年11月16日に領域「言葉」に関する科目(「保育方法の研究Ⅲ」第8回目)で行ったものである。

(2) 授業内容

今回取り上げる、オノマトペ(学生に対する説明では、学生に馴染みのある「擬音」という語を使用した)を用いた活動は、オノマトペの視覚化、オノマトペクイズその1、オノマトペクイズその2、の3種類である(これらは学生同士による活動だが、いずれも保育現場での実践を想定している)。それぞれの活動手順と、各活動に対応する幼稚園教育要領関連箇所(領域「言葉」と領域「表現」に限る)を示そう(表1^{注1}~表3)。

表1 オノマトペの視覚化活動手順と幼稚園教育要領関連箇所

活動手順	幼稚園教育要領関連箇所
① 3分間で思いつくオノマトペをワークシートに書き出す。	領域「言葉」内容(7)生活の中で <u>言葉の楽しさや美しさに気付く。</u> 「言葉」内容(8)いろいろな体験を通じて <u>イメージや言葉</u> 領域「表現」ねらい(3)生活の中で <u>イメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</u> 「表現」内容(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
② 4人1組の班を作る。	
③ 班員の1人がオノマトペを1つ選び、それを他の班員に知らせる。	「言葉」内容(7)(8)、「表現」内容(1)
④ そのオノマトペのイメージを各自色ペンでワークシートに描く。	「言葉」内容(7)(8) 「表現」ねらい(2) <u>感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</u> 「表現」ねらい(3)、「表現」内容(1) 「表現」内容(4) <u>感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。</u>
⑤ ④で描いた絵を班内で見せ合う。	「言葉」内容(7)(8)、「表現」ねらい(2)(3) 「表現」内容(1)
⑥ ③④⑤を残りの班員分繰り返す。	「言葉」内容(7)(8)、「表現」ねらい(2)(3) 「表現」内容(1)(4)
⑦ この遊びを保育現場で行う際の活動のねらいをワークシートに記入する。	

表2 オノマトペクイズその1活動手順と幼稚園教育要領関連箇所

活動手順	幼稚園教育要領関連箇所
① 2人1組になる。	
② 各自オノマトペを2つ選び、それが何を表すのかをワークシートに記入する。 例、ザーザー：雨の降る音	<p>領域「言葉」内容(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、<u>考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。</u></p> <p>領域「言葉」内容(7)生活の中で<u>言葉の楽しさや美しさに気付く。</u></p> <p>「言葉」内容(8)いろいろな体験を通じて<u>イメージや言葉を豊かにする。</u></p> <p>領域「表現」ねらい(2)<u>感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</u></p> <p>「表現」ねらい(3)生活の中で<u>イメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</u></p> <p>「表現」内容(1)生活の中で様々な音、形、色、<u>手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。</u></p> <p>「表現」内容(4)<u>感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。</u></p>
③ ペアの相手にオノマトペ1つを口頭で伝え、相手はそれが何を表すのかを当てる。互いに2問ずつクイズを出し合う。	<p>「言葉」ねらい(2)<u>人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</u></p> <p>「言葉」内容(7)(8)、「表現」ねらい(2)(3) 「表現」内容(1)</p>
④ 感想をワークシートに記入する。	

表3 オノマトペクイズその2活動手順と幼稚園教育要領関連箇所

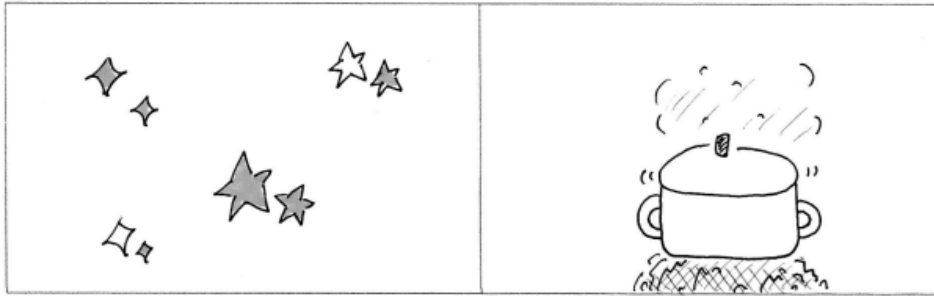
活動手順	幼稚園教育要領関連箇所
① 各自オノマトペを1つ選び（ペアはクイズその1と同じ）、そのイメージをワークシートに色ペンで描く。 （この時点では選んだオノマトペはワークシートに記入しない。）	<p>領域「言葉」内容(7)生活の中で<u>言葉の楽しさや美しさに気付く。</u></p> <p>「言葉」内容(8)いろいろな体験を通じて<u>イメージや言葉を豊かにする。</u></p> <p>領域「表現」ねらい(2)<u>感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。</u></p> <p>「表現」ねらい(3)生活の中で<u>イメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。</u></p> <p>「表現」内容(1)生活の中で様々な音、形、色、<u>手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。</u></p> <p>「表現」内容(4)<u>感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。</u></p>
② 描いた絵をペアの相手に見せ、相手は元のオノマトペが何かを当てる。互いに1問ずつクイズを出し合う。	<p>「言葉」ねらい(2)<u>人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。</u></p> <p>領域「言葉」内容(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、<u>考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。</u></p> <p>「言葉」内容(7)(8)、「表現」ねらい(2)(3) 「表現」内容(1)(4)</p>
③ 感想をワークシートに記入する。	

▽学生によるオノマトペの視覚化

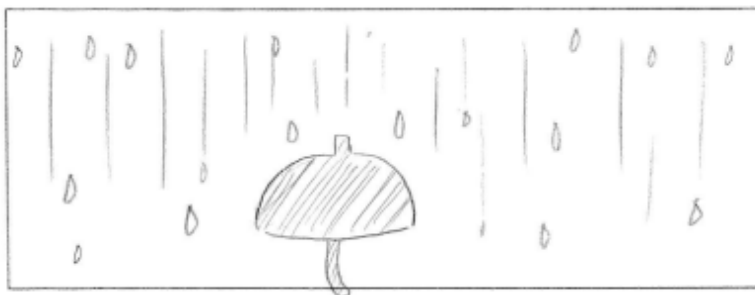
○ 擬音のイメージを色ペンで絵に描いてみよう。

擬音 (*わっわわ*)

(*くっく*)



▽学生によるオノマトペクイズその2



▽何の擬音か (クイズ終了後に記入する)

(*ザーザー*)

表1～表3に示した通り、授業担当者である筆者はオノマトペを用いた3種類の活動は、領域「言葉」と領域「表現」に深く関わるものと見る。

5. 学生の記述の分析

本節では4節に示した、オノマトペの視覚化⑦ねらいの記入(表1)、オノマトペクイズその1④感想の記入(表2)、オノマトペクイズその2③感想の記入(表3)について学生の記述内容を分析する。

(1) オノマトペの視覚化のねらい

オノマトペの視覚化を保育現場で行う場合、何を活動のねらいとするかについて、学生が記述したものを以下のように分類し^{注2}、その内容が幼稚園教育要領領域「言葉」または領域「表現」のどの記述と関連するかを示す(次頁表4)。これにより、オノマトペを視覚化する活動を、学生も領域「言葉」と領域「表現」に関わる活動と捉えたかどうかを検証する。

表4で領域「言葉」または領域「表現」の記述に関連するねらいは、全ねらい数158コ中138コで87.3%を占める。したがって、学生もオノマトペを視覚化する活動を、領域「言葉」と領域「表現」が統合されたものと捉えたことがわかる(本授業は領域「言葉」に関するもののため、学生の記述が領域「言葉」と関連するのは想像に難くない。しかし、授業担当者である筆者はオノマトペの視覚化が領域「表現」にも関わるとは授業内で伝えていない)。

表4で10.0%を超えるものは、「～を楽しむ・楽しさを味わう」の26.6%、「～を表現する」の15.2%、「想像力を育む・膨らませる・養う・高める」の10.1%がある。このことから多くの学生がオノマトペを視覚化する活動を、単に言葉に触れるものという認識にとどまらず、言葉やイメージ、感じたことを「表現」し、それを「楽し」み、「想像力を育む」ものと認識したことが窺える。

表4 オノマトペの視覚化に対する活動のねらい

ねらいの種類	該当数 (コ)	割合	幼稚園教育要領関連箇所
～を楽しむ・楽しさを味わう（下記○：内訳）	42	26.6%	
○イメージを表現することを楽しむ	(15)	(9.5%)	「表現」ねらい(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 「表現」ねらい(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。 「表現」内容(4)感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
○音を楽しむ	(7)	(4.4%)	「言葉」内容の取扱い(4)幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
○音を絵に表現する楽しさを感じる	(5)	(3.2%)	「表現」ねらい(2)(3)、「表現」内容(4)
○イメージを持つ楽しさを味わう	(4)	(2.5%)	「言葉」内容(8)いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。 「表現」ねらい(3)
○伝え合う楽しさを味わう	(3)	(1.9%)	「表現」ねらい(2)人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
○言葉を表現することを楽しむ	(2)	(1.3%)	「言葉」目標相当箇所〔経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞くこととする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。〕 「表現」ねらい(2)
○上記以外（▼該当例）	(6)	(3.8%)	
「擬音に親しむことを楽しむ」「思い思いの絵を描くことを楽しむ」「言葉遊びを楽しむ」「言葉の楽しさを感じる」「言葉のリズムを楽しむ」「（音が出る楽器を作り、）音を出すことを楽しむ」			「言葉」内容の取扱い(4) 「表現」内容(4)
～を表現する（下記○：内訳）	24	15.2%	
○イメージを表現する	(13)	(8.2%)	「表現」内容(4)
○音を絵に表現する	(7)	(4.4%)	「表現」内容(4)
○感じたことを表現する	(2)	(1.3%)	「表現」内容(4)
○上記以外（▼該当例）	(2)	(1.3%)	
「自分の思ったり、感じたものを言葉にして表現する」「実態のないものを形に起こす」			「言葉」内容(2)したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。 「表現」内容(4)
想像力を育む、膨らませる、養う、高める	16	10.1%	「言葉」内容(8)
身近な、生活の中の、身の回りの音に気づく	10	6.3%	「表現」内容(1)生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
表現力を高める、養う、身につける	8	5.1%	「表現」目標相当箇所〔感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。〕
様々な擬音にふれる	8	5.1%	「言葉」内容の取扱い(4)
音、擬音に親しむ	8	5.1%	「言葉」内容の取扱い(4)
言葉のおもしろさを感じる	6	3.8%	「言葉」内容(7)生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
友だちとの捉え方、作品の違いに気づく	5	3.2%	
身近にある音に興味を持つ	4	2.5%	「表現」内容(1)
出来事と言葉・擬音を結びつける	4	2.5%	
擬音のイメージを持つ	3	1.9%	「言葉」内容(8)
伝える力を身につける	3	1.9%	「言葉」内容(2)
友だちとの違いを認める、受け入れる	2	1.3%	
語彙力をつける	2	1.3%	「言葉」内容(8)
その他（領域「言葉」「表現」に関連）▼該当例	5	3.2%	
「擬音を実際に使って、（語彙力をつける）」「発想力を豊かにする」「自分なりに擬音を感じ、（想像をふくらませる）」「考えてかく力がつく」「季節の風の音を感じ、（音を楽しむ）」			「言葉」内容(5)生活の中で必要な言葉が分かり、使う。 「表現」目標相当箇所、「表現」内容(1)(4) 「表現」内容の取扱い(1)豊かな感性は、身近な環境と十分に開く中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。その際、風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること。
その他（領域「言葉」「表現」に関連しない）	8	5.1%	
合計	158	100%	

領域「言葉」「表現」に関連するねらいの数 138
上記ねらい数(138)の合計(158)に占める割合 87.3%

(2) オノマトペクイズその1についての感想

続いて、当該オノマトペが何を表すかを当てるオノマトペクイズその1（以下、クイズ1またはクイズ1（この何を表すか）と略記する）の感想について、これを感想の種類毎に分類したものを示す^{注3}（表5）。

表5 クイズ1の感想

感想種類	該当人数 (人)	全人数 (40)に占 める割合
オノマトペのイメージ等の相手との違い	19	47.5%
おもしろい、楽しい等の感情	16	40.0%
1つのオノマトペから複数のイメージ	10	25.0%
オノマトペのイメージ等の相手との共通性	7	17.5%
すぐ当てることができた、伝わった	7	17.5%
その他(同種の感想を述べた人数が2人未満)	(24)	

表5で20.0%以上を占める感想を取り上げる（この基準は次のクイズ2（表6）でも同様）。感想で最も多いのは、「オノマトペに対するイメージ等の相手との違い」に関するもので47.5%と半数近くを占める。これに関連する感想は「1つのオノマトペから複数のイメージ」で（25.0%）、これは自分のイメージと相手のイメージの違いを受けてのものである。同一のオノマトペであってもそこからイメージするものが相手と違うという体験をすることは、言葉に対する感覚や感性を刺激し、それを豊かにすると考えられる。

2番目に多い感想は「クイズに対するおもしろい、楽しい等の感情」である（40.0%）。その例には「自分がイメージしていなかったようなイメージが出て面白いなと思いました。」「擬音語で頭に浮かぶものが共通するのが面白いなと思った。」「いろんなイメージができて楽しかった。」「考える時間が楽しいと感じた」等があり、他者とのイメージの差異や共通性について、また、イメージすること、考えることについて、これらをおもしろい、楽しいと感じたことがわかる。当該活動を楽しむことは遊びの基本・前提条件であり、楽しみながらクイズ1を行うことによって言葉に対する感覚や感性が豊かになることが期待できる。

(3) オノマトペクイズその2についての感想

次に、当該イラストが何のオノマトペを表すかを当てるオノマトペクイズその2（以下、クイズ2またはクイズ2（この絵何のオカ）と略記する）の感想について、これを感想の種類毎に分類したものを示す（表6）。

表6 クイズ2の感想

感想種類	該当人数 (人)	全人数 (40)に占 める割合
想像するオノマトペが相手と違う	11	27.5%
おもしろい、楽しい等の感情	11	27.5%
難しい	11	27.5%
1つの絵から複数のオノマトペ	9	22.5%
すぐ当てることができた、伝わった	8	20.0%
このような描き方によってわかりやすくなる	7	17.5%
このような描き方は伝わりづらい	3	7.5%
イメージの共通性	2	5.0%
その他(同種の感想を述べた人数が2人未満)	(30)	

感想で最も多いものの1つに「想像するオノマトペの相手との違い」（27.5%）がある。これに関連する感想は「1つの絵から複数のオノマトペ」であり（22.5%）、これも想像するオノマトペが相手と違ったことを受けてのものである。クイズ1（このオ何を表すか）同様、相手とイメージが異なるという体験は、言葉やイメージに対する感覚や感性を刺激し、それを豊かにすると考えられる。

クイズ1と比較して目につくのはクイズに対する「難しい」という感想である（27.5%）。これはクイズ1にはなかったものである。適度な難しさはクイズに対する挑戦意欲やおもしろさにつながるが、クイズ2では、「おもしろい、楽しい等の感情」の割合は27.5%であり、クイズ1の同感想の47.5%よりも20ポイント低い。これは、クイズ2の難しさがクイズに対する興味、楽しさを減じさせたと推察できる。したがって、クイズ2は保育現場で子どもが体験する遊びとしては難易度を下げる工夫が必要となる。ただし、クイズ2に対する「おもしろい、楽しい等の感情」は感想の中では最も多いものの1つであり、クイズ2は難易度に課題を残すものの、言葉に対する感覚や感性が豊かになる前提条件は保っている。また、「すぐ当てることができた、伝わった」という感想も20.0%を占める。これは、絵の描き方次第では、クイズ2は難しいものにはならず、子どもでも楽しめる可能性を示唆している。

6. オノマトペを用いた日記がもたらす影響

本節では、オノマトペを用いた日記（以下、オノマトペ日記）を書くことがオノマトペを使用した活動に与える影響について検証する。

まずは本取り組みを行うことにした経緯について触れておこう。無藤（2017）では、保育者のための表現トレーニングとして、生活の中で耳にする音を記録する「音日記」が紹介されている（p.148）。これは必ずしもオノマトペのみを記録するものではないが、音日記を保育者がつけることによって「音への感覚や気付きも豊かになっていくはずです」（同頁）と述べられている。これを参考にし、授業履修者40人の半数に当たる20人に対し、事前にオノマトペ日記を課した。その内容は、授業前日までの1週間、その日の中で印象に残った3つの出来事・音についてオノマトペを用いて表現するというものである。同日記を課した学生には例として事前に「ひざ掛けの肌触りがモフモフとしていた。」「霧雨がショワショワと降っていた。（自身で創作可）」「お腹がぐーぐー鳴った。」を示しておいた^{注4}。以下、オノマトペ日記に取り組んだ20人を日記群、取り組んでいない20人を非日記群と呼ぶことにする（5節表4～表6は両群を区別せずに示したものである）。

4節「(2) 授業内容」に示したものの内、オノマトペの視覚化①3分間オノマトペを書き出す、⑦活動のねらいを記入する（以上表1）、クイズ1（このオ何を表すか）④感想を記入する（表2）、クイズ2（この絵何のオか）③感想を記入する（表3）について両群に違いが見られるかを検証したい。

(1) 3分間オノマトペを書き出す活動について

授業で学生がオノマトペに関する活動を始めるに当たり、身の回りにはどのようなオノマトペがあるのかを確認する目的で、3分間思いつくオノマトペをワークシートに書き出す活動を行った。非日記群、日記群それぞれが書き出したものを次のように7種に分類し^{注5}、各種の該当数及び割合を示す（次頁表7^{注6}）。

1. 有情物から発せられる音を表すもの…ワンワン、ぐーぐー、バタバタ、
2. 非情物から発せられる音を表すもの（動作対象が非情物の場合を含む）…ザーザー、パシャパシャ、ドンドン
3. 有情物の動作の擬態語…うとうと、きびきび、パクパク
4. 非情物の動き・現象・状態の擬態語（皮膚感覚に関するものを除く）…しんしん、ピカッ、ヒ

ラヒラ

- 5. 皮膚感覚でわかる非情物の状態…ギトギト、ふわふわ、ベタベタ
- 6. 人体に生じる感覚を表すもの…ジンジン、ズキズキ、チカチカ
- 7. 感情を表すもの…ウキウキ、ドキドキ、プンプン

表7 オノマトペ分類結果と両群比較

分類	非日記群 該当数 (コ)	割合	日記群 該当数 (コ)	割合	検定
1	92	12.4%	87	10.9%	
2	246	33.2%	294	36.9%	
3	112	15.1%	107	13.4%	
4	142	19.1%	151	18.9%	
5	96	12.9%	103	12.9%	
6	19	2.6%	21	2.6%	
7	35	4.7%	34	4.3%	
合計	742		797		

*:p<0.05、**:p<0.01、空欄:非有意

合計では非日記群の742よりも日記群の797の方が微差ながら多いものの、1人当たりには換算すると、非日記群37.1コ、39.9コとなり、これは特筆すべき差ではない⁷⁾。書き出したオノマトペの種類に関しても両群に有意な差は認められない(有意差を求めるためにカイ二乗検定を行った。以下、表8～表10でも同様)。

(2) オノマトペを視覚化する活動のねらいについて

5節(1)では、オノマトペを視覚化する活動のねらいについて表4に示した。これを非日記群と日記群に分けて示すと、次のようになる(表8、次頁に続く)。

表8では唯一「イメージを表現する」が非日記群12.0%(10コ)、日記群3.6%(3コ)と、有意水準5%で有意な差がついた。しかし、日記群では「イメージを表現することを楽しむ」が10.8%(9コ)あるため、「イメージを表現する」という語句は日記群に特別少ないものとはいえない。結果的にオノマトペを視覚化する活動のねらいでは、両群に特筆すべき差は見られない。

表8 活動のねらいに関する両群の差異

ねらいの種類	非日記群 ねらい数 (コ)	全ねらい 数(75) に占める 割合	日記群 ねらい数 (コ)	全ねらい 数(83) に占める 割合	検定
～を楽しむ・楽しさを味わう(下記○:内訳)	18	24.0%	24	28.9%	
○イメージを表現することを楽しむ	(6)	(8.0%)	(9)	(10.8%)	
○音を楽しむ	(4)	(5.3%)	(3)	(3.6%)	
○音を絵に表現する楽しさを感じる	(3)	(4.0%)	(2)	(2.4%)	
○イメージを持つ楽しさを味わう	(1)	(1.3%)	(3)	(3.6%)	
○伝え合う楽しさを味わう	(1)	(1.3%)	(2)	(2.4%)	
○言葉を表現することを楽しむ	(0)	(0.0%)	(2)	(2.4%)	
○上記以外	(3)	(4.0%)	(3)	(3.6%)	
～を表現する(下記○:内訳)	13	17.3%	11	13.3%	
○イメージを表現する	(10)	(12.0%)	(3)	(3.6%)	*
○音を絵に表現する	(1)	(1.2%)	(6)	(7.2%)	
○感じたことを表現する	(1)	(1.2%)	(1)	(1.2%)	
○上記以外	(1)	(1.2%)	(1)	(1.2%)	

表8（続き）

ねらいの種類	非日記群 ねらい数 (コ)	全ねらい 数 (75) に占める 割合	日記群 ねらい数 (コ)	全ねらい 数 (83) に占める 割合	検定
想像力を育む、膨らませる、養う、高める	7	9.3%	9	10.8%	
身近な、生活の中の、身の回りの音に気づく	7	9.3%	3	3.6%	
表現力を高める、養う、身につける	5	6.7%	3	3.6%	
様々な擬音にふれる	5	6.7%	3	3.6%	
音、擬音に親しむ	3	4.0%	5	6.0%	
言葉のおもしろさを感じる	2	2.7%	4	4.8%	
友だちとの捉え方、作品の違いに気づく	3	4.0%	2	2.4%	
身近にある音に興味を持つ	2	2.7%	2	2.4%	
出来事と言葉・擬音を結びつける	2	2.7%	2	2.4%	
擬音のイメージを持つ	0	0.0%	3	3.6%	
伝える力を身につける	1	1.3%	2	2.4%	
友だちとの違いを認める、受け入れる	0	0.0%	2	2.4%	
語彙力をつける	1	1.3%	1	1.2%	
その他	6	8.0%	7	8.4%	
合計	75	100%	83	100%	

* : p<0.05、** : p<0.01、空欄:非有意

(3) クイズ1（このオ何を表すか）の感想について

続いて、クイズ1の感想における両群の差を見る。5節(2)に示した表5を非日記群と日記群に分けて示す(表9)。

表9 クイズ1の感想に関する両群の差異

感想種類	非日記群 (人)	20人に占 める割合	日記群 (人)	20人に占 める割合	検定
オノマトペのイメージ等の相手との違い	7	35.0%	12	60.0%	
おもしろい、楽しい等の感情	6	30.0%	10	50.0%	
1つのオノマトペから複数のイメージ	2	10.0%	8	40.0%	*
オノマトペのイメージ等の相手との共通性	6	30.0%	1	5.0%	*
すぐ当てることができた、伝わった	5	25.0%	2	10.0%	
その他(同種の感想を述べた人数が2人未満)	(12)		(12)		

* : p<0.05、** : p<0.01、空欄:非有意

両群の差がカイ二乗検定において p<0.05 のもの、あるいは各種感想の、20人に占める割合に20ポイント以上の差がついたものを取り上げる（この基準は次のクイズ2(表10)でも同様）。

「1つのオノマトペから複数のイメージ」に関する感想を述べたのは、非日記群10.0%、日記群40.0%と日記群が多く、両群の差は有意水準5%で有意であった。この感想は、出題者が提示したオノマトペについて、解答者が出題者の想定するものとは別の答えを伝えたことに起因する。同類の感想として「オノマトペのイメージ等の相手との違い」があり、非日記群35.0%、日記群60.0%と、こちらも日記群の方が25ポイント多い。日記群は、事前に1週間、ある出来事・音に特定のオノマトペを結びつけて言語化しているため、オノマトペに対応する出来事・音へのイメージが固定化されていた可能性がある。そのため、想定していたものとは別の答えを聞き、意外に思い、上記2種類の感想が多くなったと推察できる。「オノマトペのイメージ等の相手との共通性」に言及した学生が非日記群30.0%、日

記群 5.0%と、日記群の方が少ない（両群の差は有意水準 5%で有意）のも日記群が相手との違いに着目することの裏返しの傾向として解釈できる。

「おもしろい、楽しい等の感情」について述べた学生は非日記群 30.0%、日記群 50.0%となり、日記群の方が 20 ポイント多い。1 週間、日記によりオノマトペに親しむことはオノマトペに関する活動をより楽しいと感じさせるようである。

(4) クイズ 2 (この絵何のオカ) の感想について

次にクイズ 2 の感想における両群の差を示す (表 10)。

表10 クイズ2の感想に関する両群の差異

感想種類	非日記群 (人)	20人に占める割合	日記群 (人)	20人に占める割合	検定
想像するオノマトペが相手と違う	6	30.0%	5	25.0%	
おもしろい、楽しい等の感情	3	15.0%	8	40.0%	
難しい	5	25.0%	6	30.0%	
1つの絵から複数のオノマトペ	6	30.0%	3	15.0%	
すぐ当てることができた、伝わった	4	20.0%	4	20.0%	
このような描き方によってわかりやすくなる	0	0.0%	7	35.0%	**
このような描き方は伝わりづらい	0	0.0%	3	15.0%	
イメージの共通性	2	10.0%	0	0.0%	
その他(同種の感想を述べた人数が2人未満)	(19)		(11)		

*:p<0.05、**:p<0.01、空欄:非有意

最も大きな差がついたのは「このような描き方によってわかりやすくなる」であり、非日記群 0.0%、日記群 35.0%で、両群の差は有意水準 1%で有意であった。感想の例は「白黒で描くより色を付けることで、イメージが伝わってくる」「例えば、温かい表現はオレンジ、冷たい表現は青で描くと、雰囲気伝わる」「細かく描いてみると、すごくわかりやすい」「具体的なイラスト(ラーメンをすする様子など)だと、擬音が浮かびやすい」というものである。これに関連する感想には「このような描き方は伝わりづらい」があり、日記群にのみコメントがある(15.0%。例、「絵が線で表されていると、答えを出すのが難しい」「シクシク、ザーザー、ポタポタなど悲しい気持ちを表現する言葉や似た表現の言葉を絵に表現してみせると伝わりにくい」「抽象的な絵だと分かりにくい」)。これらの結果は日記群の方が、どのような描き方が相手に伝わりやすいのかに対して意識が高いことを示している。これは、日記群はオノマトペ日記によりオノマトペに対する意識が高まっていた分、オノマトペに関するクイズを活動として成立させようという意識も高くなっていたことによると推測できる。

「おもしろい、楽しい等の感情」は非日記群 15.0%、日記群 40.0%と、日記群の方が 25 ポイント多い(ちなみに、この差は有意水準 10%で有意)。1 週間オノマトペ日記によりオノマトペに親しむことは、クイズ 2 においてもオノマトペに関する活動をより楽しいと感じさせるようである。クイズ 1 (このオ何を表すか) にもいえることだが、この効用は保育者がオノマトペを用いた活動を保育現場に導入する動機づけとなるだろう。

6 節の検証によりオノマトペ日記は、オノマトペを用いた活動をより楽しくさせ、活動を成立させよう、より良くしようとする意識を高めることが示唆されたため、オノマトペ日記は保育者が取り組むに値するものと考え(オノマトペ日記によりオノマトペの表すイメージが固定化されることへの対策については、次節で触れる)。

7. 今後の課題

今回の実践から見えてきた課題を最後に示しておこう。

- ・ 学生がクイズ1（このオ何を表すか）、クイズ2（この絵何のオか）についても領域「言葉」と領域「表現」が統合されたものと捉えたかどうかについて調査する必要がある。
- ・ クイズ2は、答えが出にくい場合、答えに選択肢を設ける、オノマトペの頭文字を伝える等により難易度を調整する必要がある。
- ・ オノマトペ日記によりオノマトペの表すイメージが固定化されることに関しては、1つのオノマトペは様々な事柄を表し得ると学生に伝え、学生が日記を書く際、1つのオノマトペを使い、複数の事柄を表現することで解消されると推測する（例、ゴロゴロであれば、「一日ゴロゴロして過ごす（有情物の動作）」「目にゴミが入り、ゴロゴロする（人体に生じる感覚）」）。
- ・ オノマトペ日記の、本論で述べた内容とは別の効用についても今後探っていく必要を感じる（例、保育者としての感性を高めることにつながるか）。

これらについては稿を改めて論じたい。

注

- 1 表1⑦では、一連の活動終了後に、活動のねらいを記入している。本来、ねらいは活動の前に書くものだが、一度その活動を体験的に理解した後の方がねらいを書きやすいと考え、このような手順とした。
- 2 学生が記述したねらいを単文に分け、単文1つをねらい1コとして数えている。
- 3 表5では、各種類に該当する感想のコメント数ではなく、各種類に該当する感想を述べた人数を基に、(全人数に占める)各割合を計算している(5節(3)以降に示す表6、表9、表10でも同様)。これは、オノマトペを用いた活動と直接関係しない感想を分母から排除して計算する方法を採る方が実相をより反映できると判断したためである。
- 4 学生が書いたオノマトペ日記の例をいくつか示しておく。
「明日がテストで気分がドローンだった。」「今日は髪の毛がサラサラだった。」「ボールペンをカチカチすることが多かった。」
- 5 以下の福田・芋坂(1992)の分類を参考にした。
聴覚刺激の表現(例:鳥の鳴き声をまねた、「カアカア」)。
視覚の表現(例:月の輝きを示す、「ピカッ(ト)」)。
味覚の表現(例:にんにくの辛さを訴えた、「ピリッ(ト)」)。
動作の表現(例:四つんばいで動く動作を要求した、「ノッシノッシ」)。
体内の感覚の表現(例:飲んだジュースが食道を通るときの感じを言った、「ゴワゴワ」)。(福田・芋坂1992、p.814)
- 6 表7では、いくつかのオノマトペは2つ以上の種類にまたがって分類している。例えば、「カンカン」であれば、2.非情物から発せられる音を表すもの(遮断機の音)と、7.感情にまつわるもの(カンカンに怒る)の両方に分類している。したがって、表7の合計は各群の学生が書き出したオノマトペを単純に足した数よりも多くなっている。
- 7 各群が書き出したオノマトペの異なり語数も調査した。その結果は、非日記群279コ、日記群297コであり、1人当たり換算すると、非日記群14.0コ、日記群14.9コとなり、これも特筆すべき差ではない。

【引用文献】

- 中村 礼香(2021)『「聴く活動」を通した総合的な表現遊び—『幼児と表現』における授業実践の検証—』『鹿児島女子短期大学紀要』第58号 鹿児島女子短期大学
- 福田 香苗(1999)「10章 幼児の発話にみられる擬音語・擬態語」『感性のことばを研究する 擬音語・擬態語に読む心のありか』(芋坂直之編著)新曜社

- 福田香苗・芋坂直行 (1992) 「擬音語・擬態語の認知 (16) ——K 児の 3 歳 6 ヶ月時の観察記録より——」『日本心理学会第 56 回大会発表論文集』日本心理学会第 56 回大会準備委員会
- 松崎 史周 (2020) 「保育におけるオノマトペの教材化—オノマトペかるたを作成して—」『日本女子体育大学紀要』第 50 巻 日本女子体育大学
- 無藤 隆 (2017) 『イラストたっぷりやさしく読み解く幼稚園教育要領ハンドブック 2017 年告示板』学研教育みらい
- 村瀬瑠美・寺山由美 (2018) 「幼児期の身体表現活動における保育者の用いるオノマトペ—身体表現活動におけるイメージに着目した分類—」『スポーツ運動学研究』31 巻
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

SUMMARY

I will verify the lesson practice aimed at making onomatopoeia a nursery care teaching material. Visualization of onomatopoeia and quizzes using onomatopoeia integrate area "words" and area "expressions" of childcare content, and stimulate and enrich the senses and sensibilities of words. In addition, writing a diary using onomatopoeia for one week in advance affects making the activity more enjoyable, raising awareness to establish the quiz as an activity, and fixing the image of the onomatopoeia.

Keywords: onomatopoeia, area " language ", area "expression", sense of words, onomatopoeia diary